

唯識論の阿頼耶識

富貴原章信

唯識論（二、一三以下）には、初能變の阿頼耶識が、自

相門より伏斷位次門にいたる十章をもつて明かされるのであるが、いまは、その中、第一の自相門より第五の行相門にいたる五門について考へてみたいと思ふ。唯識三十頌に初能變の三相、即ち自相と果相と因相とを明して

初阿頼耶識 異熟一切種（二）

初のは阿頼耶識なり。異熟なり。一切種なり（唯識論）

この中、阿頼耶識は異熟なり一切種なり（安慧釋）

（一）果報識とは煩惱と業とのために引かるゝ故に果報と名く。（二）また本識とも名く。一切の有爲法の種子が所依止なり。（三）また宅識とも名く。一切種子が所栖處なり。また藏識と名く。一切種子が隱伏の處なり（轉識論）

一 自相

次に長行釋によつて今の二句を考へやう。

唯識論

初能變の識をば大小乗教に阿頼耶と名く。この識には具さに能藏と所藏と執藏との義あるが故に。謂く雜染のために互に縁となるが故に。有情に執せられて自の内我とせらるゝが故に。これは即ち初能變にあらゆる自相を顯示す。因と果とを攝持して自相となすが故に。この識の自相は分位多なりと雖も、藏といふは初なり。過重し。この故に偏に說けり。

安慧釋

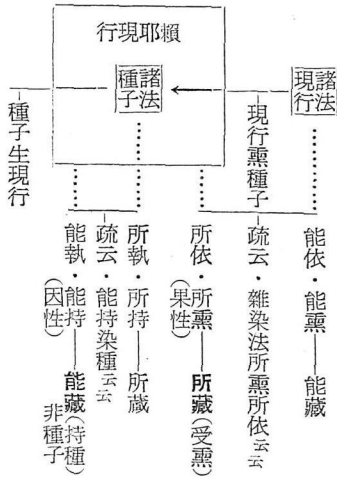
この中とは直前に說かれたる三種の轉變を指す。阿頼耶とは阿頼耶識についていふなり。識とは即ち異熟の轉變なり。この識は一切雜染法の種子が所依なるが故に阿頼耶（藏）なり。阿頼耶と所依とは同義なり。またこの識には一切法が果相として、藏せられ執持せられ

る依處なり(第一義)。或はかの阿頼耶識は因相として一切法の中に藏せられ執取せらる。この故に阿頼耶なり(第二義)。了別するが故に識なり。

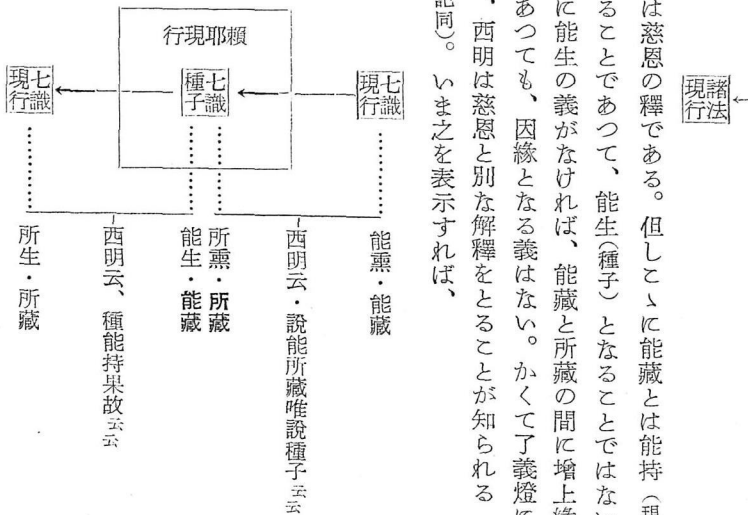
三十頌の安慧釋は荻原博士の譯本による。但しこの安慧釋には西藏譯あり。夙に山口先生は、これを譯して所藏せられる。今はこれを披見することを得て、荻原本に修治を加へたものが今の引用文である。ここに記して以て謝意を表する。

こゝに初能變の三相の中、その自相を明し、頌文では初阿頼耶識の一句を釋する。唯識論ではこゝに頼耶の三藏をいだが、その中まづ能藏と所藏について考へよう。

唯識論には能藏所藏の義を明して、雜染のために互に縁となるが故にといふが、さらに唯識述記にはこの互に縁となる關係を詳しく釋する。いま之を表に示せば、

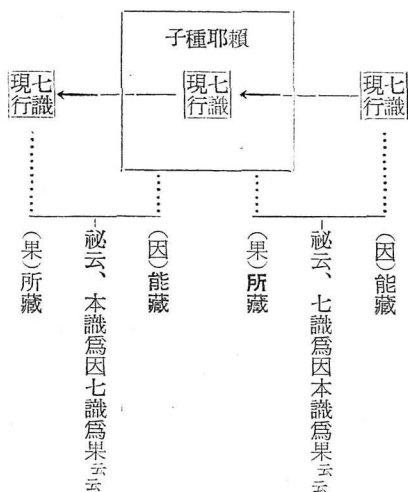


右は慈恩の釋である。但しこゝに能藏とは能持(現行)となることであつて、能生(種子)となることではない。然るに能生の義がなければ、能藏と所藏の間に増上縁の義はあつても、因縁となる義はない。かくて了義燈によれば、西明は慈恩と別な解釋をとることが知られる(太賢學記同)。いま之を表示すれば、



これは演祕に引かれる相傳の三釋の中、第三釋に相當する。明かにこの釋は互に因縁となるといふ論文にかな

ふであらうが、して見ると能藏所藏は現行頼耶について云はれなくなる。それ故に演祕の有義はさらに別な解釋をとるのであるが、これは西明の第一釋に同じであらう。



但しこゝに本識爲因といふは、嚴密に云ふならば、それは頼耶の現行を能生の因とするのではなく、この頼耶によつて攝持せられる七轉識の種子を因すると見るべきであらう。この點、第三釋もまた不充分であると見られる。何れにしても多少の缺點を免れないが、いまは暫らく慈恩の釋をもつて護法説と見るであらう。

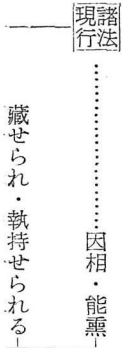
次に執藏は有情に執せられて自の内我とせられる、そ

の我愛縁執の邊に名けるのである。この執藏の釋は安慧釋、轉識論に見出されない。そして唯識論には、第八識の我愛縁執の邊を強調せんがために、偏にこの阿頼耶の名を初に説くと釋する。この點、唯識論は殊に執藏を重視するのである。かくて頼耶の三藏をたて、特にそこに執藏の義を加へ、且つこれを重視するのは、護法獨自の説であると見られる。但し能藏所藏執藏の三藏をもつて、阿頼耶を明すことは、既に攝論の衆名章にも見られる。つまり護法はこれを承けるのである。

次に安慧釋を見るに、阿頼耶、即ち藏の義を釋するに二義をいだが、これは注目すべきである。まづ第一解には、一切法(轉識現行)が果相(種子)として藏せられ、執持せられる依處なりといふ。轉機の現行が能熏(因)となつて、それゝその所熏の種子(果)を阿頼耶の中に熏習する。阿頼耶(現行)はその所熏の種子の依處となる。所熏の種子が藏せられる點において、頼耶は所藏となるのである。して見るとこの第一解は所藏をあかすと考へられる。また第二解にはかの阿頼耶識は因相(能生種)として一切法(所生現行)の中に藏せられ執取せられるといふ。こゝに藏せらるゝとあるは解りがたいが、藏せらるゝと執取せられると同義であれば、我と執取せられることを

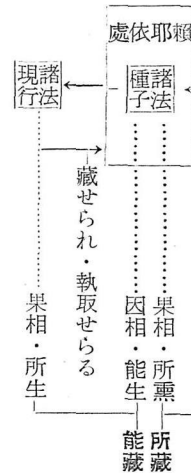
表はすとも考へられる。然らばこれは執藏の意味ともなるが、しかしこゝに安慧釋では別にその執藏が解釋されるのではない。これに對して唯識論には、能藏所藏は合釋せられ、執藏は別釋せられる。こゝに護法と安慧と執藏の取扱ひ方について、すでに相違が見られる。

そして安慧釋においては、この能執は一切法とされる。無論こゝに一切法といつても、それは七轉識であるが、こゝに一切といふは安慧の諸識有執の説を表すとも考へられる。然らばこの能執の諸轉識は如何にして生じたか。それは因相より起つたのである。諸識の現行は所生であり、その能生の因は阿頼耶の中に持せられる諸識の種子に他ならぬ。種子は現行を生じ、因は能く果を持する。それ故にまた頼耶を能藏ともするのである。かくてこの因相によつて頼耶をあかすは、能藏頼耶を釋すると見られる。安慧の第二解は能藏を明すのである。次に安慧の能藏所藏を表示すれば、



そしてこの解釋は前記、西明の釋に大體、一致するであらう。して見るとこれが護法の釋に異なることは言ふまでもない。

次に轉識論を見ると、こゝに四節の文がある。この中、第一は果相、第二は因相、第三四は自相を明すと見られ、從つてこの論では自相が最後にとかれる。これは唯識論、安慧釋では最初に明かされるのと反對であるが、いまは暫らく唯識論等の順序に從つて、最後の自相をあかす文より考へよう。



いま第三節と第四節とを比較するに、ともに一切種の言あり。種子を中心としてこの識を釋するが、しかも第三節には所栖處といひ、第四節には隱伏之處とある。一方には所の字があり一方にはないのである。所は能に對するが、この所の字があるか、ないかに依つて、意味する所に可なり相違が生ずるのである。およそ種子が本識を所栖處とするためには、まづ本識に熏習されなく

てはならぬ。この點、所栖は所熏を表し、それ故に果相、果體に通ずるのである。所熏があれば能熏がなければならぬが、この能熏は現起の轉識なることは言ふまでもない。現起の轉識はそれ自體の種子を宅識に熏ずる。所熏の種子は宅識を所栖處とするのである。故にこの所熏の邊よりみれば、この一節は所藏の義をあかすと思はれる。なほ義燈(四本一四左)に、宅といふは無相論に云く、これ種子の宅舎なるが故にとあるは、この文を指すのである。また大乘光の百法論疏にも阿頼耶識、此翻爲宅、宅即攝持諸法^{云々}といふのも同じ意味である。

次に隱伏とは顯現、現起に對する。現起すれば、それ〴〵一切法即ち轉識となるのであるが、しかしその能生の種子は未だ現起、顯現せず、即ち本識の中に隱伏する。故に唯識疏(三本一二左)には種子沈隱といふのである。従つてこの隱伏するもの、即ち能生の種子を中心に考ふれば、藏(阿梨耶)識は能藏の義となる。藏識が因相となつて能く一切法を生ずるのである。故に攝論の衆名章にも、この識が諸法の中に隱藏して因となるが故に阿梨耶と名くといふ。但しいまの轉識論の文は餘りにも簡單であるために、容易にその意を取ることができないが、およそ右の如く考へられるとすれば、こゝに所藏能藏が

明かされることとなり、これは大體、安慧釋に一致するのである。そしてこゝに執藏の義は明かされないが、しかし我愛緣執の義は阿梨耶ではなく阿陀那(執識)に歸する轉識論としては、それが當然である。これは唯識論の頼耶三藏の説に異であらう。以上、自相を終る。

二 果 相

次に果相について考ふれば

唯識論

此(第八現行)はこれ能く諸の界と生とを引く善不善の業が異熟果なるが故に説いて異熟と名く。此に離れて命根と衆同分等、恒時に相續して、勝れたる異熟果なりといふこと得べからざるが故に、此は即ち初能變の識のあらゆる果相を顯示す。この識の果相は多種ありと雖も、異熟といふは寛く不共なり。故に偏にこれを説けり。

安慧釋

一切の界と趣と生と種姓との中において、善不善の業の異熟果なるが故に異熟なり。

轉識論

煩惱と業とのために引かるゝが故に果報と名く。

この釋文は一見して解るやうに、轉識論より安慧釋、安慧釋より唯識論と増加してゐる。そして安慧釋の文は、唯識論の異熟の義を顯す文に殆んど一致するのである。

こゝに相違するのは、安慧釋にみられる種姓の二字であるが、これは調伏天の復註には婆羅門等の種姓とあるから（無と有との對論九〇頁）、五種姓の種姓ではない。

そしてこゝに異熟といふは、滿果の異熟生ではなく引果の眞異熟である。然らばこの異熟の意味は如何といふに、まづ俱舍論（卷六、一二右）によれば有部は異類にして熟す。即ち因は善惡、果は無記（光記）なりといふ。また唯識疏（一本四六左）には三義をもつて異熟をあかすが、

この中、第三義には、異類にして熟す。因（善惡）と異性にして果（無記）は因に酬る故にといふ。これは前の有部の義に同じである。次に俱舍論によれば經部は二義を有するものが異熟の名を得る。一には因が轉變差別して果を生じ、二には因の勢力に勝劣あり、隨つて果の生ずる時にもまた（十年二十年の）分限ありといふ。唯識疏の三義の中、第一義には變異にして熟す。因が變異（轉變差別）する時に果は方に熟するが故にといふが、これは經部の二義の中、第一義に當るのである。次に唯識疏の第二義には異時にして熟す。因と異時にして果はまさに熟する

故にとあるが、これは經部の第二義に當るであらう。かくて唯識疏の三義は俱舍論に見へるところの有部の一義と經部の二義とに、それ／＼相通すると見られるが、しかも唯識疏には第三義をもつて正義とするのである。して見ると唯識論の異熟の釋は、有部の説をうけることが知られる。但し小島私記（二本一六左）には、疏の第一義を經部師、第二義を薩婆多、第三義を大乘とするのであるが、この中、第二義をもつて有部とするは理解しがたい。また唯識疏の次下（二末八〇左）には、前三義の他に、なほ異熟因所招名異熟果といふ一義をいだが、これは結局、前の第三義に通ずるであらう。

異熟とはこれを要約して云へば、三界の果報を招く總報の果體である。善と惡との業種子を増上縁とするに由つて、感じたところの總の異熟果である。安慧釋、轉識論にはこの異熟をあかす釋文のみ存するが、唯識論には更にこれが有部において説かれるところの命根や衆同分等に異なることをあかす。これは二十唯識論の終（第十八頌）に命根・衆同分が出され、また前に唯識論において、命根衆同分など十四の不相應が破せられた部分に相應し、さらに後に阿賴耶識の存在を論證する十理證の中、第三の趣生證などにも結びつくものと見られる。次に因

相を明す文を考ふれば、

唯識論

此(第八現行)はよく諸法の種子を執持して失せざらしむるが故に、一切種と名く。此に離れて餘の法いゝ諸法の種子を執持するといふこと不可得なるが故に。此は即ち初能變の識のあらゆる因相を顯示す。この識の因相は多種ありと雖も、持種といふは不共なり。この故に偏に説けり。

安慧釋

一切法の種子の所依性なるが故に一切種なり。

轉識論

また本識も名く。一切の有爲法が種子の所依止なり。

第八識は一切法の種子を攝持する。種子の所依なるが故に、一切種ともいふのである。この釋意は唯識論、安慧釋、轉識論ともに變らない。そしてこの所依となるのは第八現行であるが、然らばこの所攝の種子を因相と見るべきか、どうかと云ふに、唯識疏には、これもまた因相とみる。因相は種と現とに通ずるのである。前の自相は種と現に通ずること無論であるが、して見ると自相因相は種現に通じ、果相は唯現とすべきであらう。但し果相もまた種現に通ずるといふ解釋もないではない。ま

た唯識疏には、この因相において有部の六因の中、同類因、俱有因、相應因、能作因など、いかに解釋するかを明し、さらに義燈にこれを詳しく釋するのである。然らばこの因相果相と自相との關係は如何といふに、

自相——總(體相)——能攝——所依——抱二爲一
果相因相——別(義相)——所攝——能依——離二無一

そしてこの三相は攝論によるのである。眞諦譯の世親攝論には、賴耶の三相は略説であつて、もしこれを廣説すれば、決定藏論の八相になるといふ。こゝに八相とは瑜伽論決擇分の初めに説かれる賴耶の八相であるが、して見ると三十頌の賴耶の三相は攝論を通じて瑜伽論の八相によると解すべきである。但し唯識論において瑜伽の八相は賴耶の十理證に結びつき、そしてこの十理證は攝論では引證品に關係するのである。こゝに眞諦と玄奘と解釋の相違があるとも見られる。

三 因相(種子)の別釋

およそ以上において初能變の三相を終る。安慧釋も次の行相所縁にうつるが、しかし唯識論には次に因相、即ち一切種を廣釋する一段がある。この中には種子の六義、所熏の四義、能熏の四義などが説かれ、唯識論としては

古來、重視せられるのである。これが委細を記すことは別の機會にゆづり、いまは注意すべき二三について記せば、初めに種子が假有か實有であるかといふに就て、安慧は假、護法は實であるとする。但しこゝに實とは理世俗によつて云ふのであつて、眞勝義において云ふのではない。そして護法は種子を相分とするのである。轉識論の次下(第二九頌)に鹿重を釋して分別性なりといふ。この鹿重は種子のことであるから、轉識論師もまた種子假有の説をとる。この點、安慧に同である。

また種子が本有のものか、新熏のものであるかに就いて三義がある。この中、唯本有の義は唯識疏に護月となし、また上古以來の通説であるともいふ。して見るとこの説は多くの論師が認めてゐたのである。但し安慧はいまの三説の中、何れの説をとるとも記されぬ。安慧釋を見ても、因轉變の釋は頗る簡單であつて、種子については餘り多くを記さぬのである。思ふにこれは安慧が種子を假有とするからであらうが、さらに調伏天の復註(中觀佛教論攷三一二頁)によれば、瑜伽行派に三種の傳統があるといひ、種子新熏説と本有説と新舊合生説とをあげ、さらに註疏の作者はこのことを墨守することに決定されないといふ。つまり安慧は三説の中、何れをとるとも決

定されぬ。唯新熏の義は難陀、勝軍の説である。

またこの本有、新熏の説を明すについて、こゝに五姓各別の説が出される。この説は唯識思想を代表すべき特色ある説であるがしかしそれは一切皆成の説には全く背反するため、すでに支那において喧しく論議せられ、また日本においても天台と法相と、南都北嶺の間に大論争をひき起し、歴史的にも重要な問題を提供するのであるが、これに就ては別に記したこともあるから、いまは省略するであらう。然らばこの三説を明すところの唯識論の文は護法の釋文かどうかと云ふに、唯識疏に本有種子を敍するが如きは護法の文であるといふ(一本六三左)。およそ因相廣釋の一段は安慧釋、轉識論には全く見へない。蓋しこの一段は唯に本有種子の一節だけではなく、その大部分が護法の釋文であると見て妨はない。但し十大論師の釋が現存せぬから確たることは何も云へないのである。

また護法は唯新熏の説を破するに就て、分別論者の心性本淨の説をも破するのである。こゝに分別論者とは唯識疏には毗婆闍婆提であるといひ、これは大衆部、一說部、説出世部、雞胤部等、一類の人師となし、またこれには新熏説をとるところの大乗の心湊師も含まれるとす

るのである。およそ大衆部等において心性本淨の説をたてることは、すでに宗輪論等にも記されるが、さらに大乘においては勝鬘、維摩經等にも説かれ、なほこれが發展すれば、起信、寶性論等の如來藏緣起の説、もしは華嚴宗の法性緣起の説ともなるであらう。眞諦の攝論宗においてこの如來藏緣起の説をたてることは、慧遠の大乗義章などにも見られる通りであるが、思ふに慈恩が大乗異師といふは、これ等の心性本淨説をみとめる一類の大乗師を指すであらう。然るに唯識論においては、この常住心性は諸法の種子とならぬ。眞如は剎那滅ではないから緣起しないといふ。唯識論では眞如凝然、不作諸法とするのである。

四 行相所緣の總釋

次に行相所緣をあかす不可知執受、處了の七字について考ふれば、安慧釋にはこの頌文が説かれる前に、可なり長い釋文が見られるが、これは次の頌文を釋する前文と見るべきであらう。

不可知の執受處と了となり(唯識論)

その執受と處との了別は不可知なり(安慧釋)

相と及び境とは分別すべからず。一體にして異なるこ

となし(轉識論)

これは唯識論に初能變を十門分別する中、第四の行相と第五の所緣門である。いま釋文を見るに、三者の長行釋には可なり相違する點がある。まづ唯識論より考ふれば、

了とは謂く了別なり。即ちこれ行相なり。識は了別するをもつて行相となすが故に。處とは謂く處所ぞ。即ち器世間なり。これ諸の有情の所依處なるが故に。執受に二あり。謂く諸の種子と、および有根身とぞ。諸の種子とは謂く諸の相名分別の習氣ぞ。有根身とは謂く諸の色根と及び根依處とぞ。この二は皆これ識に執受せらる。攝して自體となし、安と危と同ずるが故に。執受と及び處とはこれ所緣なり。阿頼耶識は因と緣との力の故に、自體の生ずるとき、内には種と有根身とを變爲し、外には器を變爲す。即ち所變をもつて自の所緣となす。行相は之に杖して起ることを得るが故に。これは略して行相と所緣をあかす文であるが、さらに次下(二、二九)によれば、この行相を見分とする。行相を相分とする説もないではないが、見分とする説を勝とする。相分名行相の説は小乗でも用ひられるが、しかし相分は唯識説では所緣となるから、もし相分を行相とす

るならば、所縁と行相との區別がなくなる。それ故に唯識論では見分名行相の説をたてるのである。安慧釋、轉識論などに、この釋は見えない。恐らく護法獨自の説であらう。

また所縁の執受について第八識は有根身と種子とを執受するといふが、さらにその種子とは相名分別の習氣であつて有漏三性の諸法の種子に他ならぬ(疏三本三五右)。それ故に無漏種は執受ではない。これは瑜伽論七十六(大正三〇、七一八)に、相名分別言說戲論習氣執受とあるによる(深密經卷一同)。また瑜伽論五十一(大正三〇、五八〇)には遍計所執自性妄執習氣といふが、これは善と無覆に通ぜず、また色法にも通じないから、こゝにいふ種子とならない。これは護法の釋であつて、安慧は別の解釋をとるのである。

安慧釋

阿賴耶識には知られざる執受の了別と器の了別とあるが故に、彼阿賴耶識の執受と處との了別は知られざるなり。その中、執受は執持なり。それは又、我等と分別する熏習と色等の法を分別する熏習となり。彼の如き熏習あるが故に、阿賴耶識によつて我等の分別と色等、法の分別とが果として執受せられる。それ故に我

等の分別と色等の分別との習氣は執受と云はれる。かの執受は阿賴耶識に依て、こゝに彼ありと特殊の相をもつて知られざるが故に、執受は知られずと説かれたり。

また所依の執持が執受なり。所依は身なり。これは色根と根依處と名となり。かの所依の執受は領受にして、一の五蘊を得ることゝ安穩とに由て執受するなり。その中、欲色界には有根身と名との執受あれども、無色界においては、色の欲食を離れ、色の異熟は現起せざるが故に、唯名の執受あるのみ。而てそれは色の習氣にして異熟にあらず。また所依の執受も此なりと明かに知られざる故、知られずと説かれたり。

處の了別とは器世間の了別なり。これもまた所縁と行相とにおいて了知し難く轉ずるが故に、知られずと説かれたり。云何にし此識の所縁と行相とは知られざるか。餘の識論者が滅定等において説くに同なり。滅定等において識は全無にあらず。理と教とに違するが故に。

こゝに執受は何かといふに、(一)遍計所執自性妄執習氣と(二)色根と根依處と(三)名であると釋する。この中まづ(一)の習氣は我等の分別、色等の法の分別の習氣といふが、

しかもこれ等は妄執とされるから我法二執を含むのである。故にいまの習氣は瑜伽論五十一の遍計所執自性妄執習氣に同であつて、唯識論の護法釋に異なるのである。唯識疏(三本三四左)によれば、この習氣の釋について安慧の二釋をあげる。識體が轉するとき能取所取の相に似て現するが、しかしその能取所取は所執の無である。故に識體の種子を離れて別に二取の種はない(同種生)。これを遍計所執自性妄執習氣といふ。また能取所取は實に體あるものではないが、別に種ありとも見られる(別種生)。何れにしても阿賴耶識はこの習氣を執持するのである。故にこれを執受といふ。また唯識論の如く行相を見分とする釋は見えない。

次に轉識論を見るに、その文は全く安慧釋、護法釋に異なる。無論、委細に検討すれば一致する所も亦ないではないが、一應は全くその釋文が異なるのである。轉識論では行相所縁を明すに、初に生起の文あり。問、此識に何の相、何の境ありやといひ、これに答へて相と及び境とは不可分別なり。一體にして異なしとある。こゝに相とは行相であり、境とは所縁である。そして不可分別は不可知にあたるのであるが、しかしこゝに玄奘譯の執受處了といふ文は見えない。また次の釋文あり。

問、もし爾らば云何が此識ありと知るや、答、事によるが故に此識ありと知る。此識はよく一切の煩惱と業と果報との事を生ず。譬へば無明の如し。當にこの無明を起すべし。相と境とは分別さるべきや、不や。もし分別さるべしと云はゞ無明といふに非ず。もし分別すべからずと云はゞ則ち有るに非るべし。而もこれ是有にして無にあらず。また欲瞋等の事あるに由て無明ありと知る。本識もまた爾なり。相と境と差別なし。但事によるが故に、その有を知るなり。此識の中に就いて具には八種の異あり。謂く依止等なり。具に九識義の中に説けるが如し。

この釋文もまた不可分別を明すのみで、執受にも處にも了別にも觸れてゐない。但しこの終りの所に、この識に八種の異ありといふは、瑜伽論の決擇分、即ち決定藏論の初にある賴耶の八相を指すとみられる。これは九識義品が決定藏論によつて九識義をあかす論といはれ、また前記の如く眞諦譯の世親攝論には、賴耶の三相は略説であつて、もしこれを廣説すれば決定藏論の八相となるといふことに依て知られる。八相とは

- (一)執持(執受) (二)本(初) (三)分明(明了) (四)種本(種子)
 (五)非是事(業) (六)身受(身受) (七)無識定(無心定) (八)非

氣絶者(命終) (括弧内は玄奘譯)

この中、初の執持相は五因をもつて、もし阿羅耶識がなければ、諸根が有執持(有執受)とならないから、それ故に能執持として阿羅耶識はなければならぬといひ、こゝに五根は阿羅耶識によつて執受されることが說かれる。また第四の種本相には、もし阿羅耶識がなければ種子を攝持するものがなくなる。それ故に種子の能攝持として阿羅耶識がなければならぬといひ、こゝに種子は阿羅耶識によつて攝持されるといふのである。然らばこの五根と種子とが執受であつて、これに更に外の器世間を加へ、これを以て阿羅耶識の境(所緣)とするは、どこに說かれるかと云ふに、これは次の所緣轉相に說かれる。



これは前記の安慧釋に一致する。前の轉識論に事によるが故に此識ありと知るといふ、その事とは、この決定藏論に在內持事といふ事と見るべきであらう。つまり執受は持事となるのである。轉識論に境とあるは、決定藏

論のこの意味において釋すべきであらう。但しこの轉識論の本頌に相當する部分は、起信論義記(中末九左)に引用せられ、三細の第一、無明業相を釋し、賴耶の業相を明すものとされるのである。

次に不可知について唯識論には、行相と内の執受は微細不可知、器界は廣大不可知であるといふ。安慧釋、轉識論にはかくの如く不可知を廣大と微細に分けて釋する文は見へない。然らばこの三種の境は三界において有無如何といふに、唯識論には欲色界には三ながらあり、無色界には種のみがあるといふ。安慧釋にもこの釋文は見られる。

五 別 釋

およそ以上において阿賴耶識の行相所緣は、大略、明かにされたであらう。安慧釋、轉識論はこれでこの一段を終り、次の相應門にうつるが、唯識論では右は略釋であつて更に廣釋の文がある。この中に四分の說など、とかれてゐるが、いまは特に注目すべき二三の問題について記せば、初めに二分說を明すに相分なしといふのを難する文がある。青等の境を緣ずるとき、もし心々所のうへに所緣の相貌なくんば、心々所は自心所緣の境を緣ず

ること能はざるべし(宗)。所縁の相なしと許すが故に(因)。餘の縁ぜざる境の如く(喩)。これは所縁の相分なしといふ正量部を破し、かねて相分を所執の無とする安慧をも破するのである。また能縁の行相なしといふを難じて、もし心々所に能縁の行相なしといはゞ、心々所は能縁にあらざるべし(宗)。能縁の相なきが故に(因)。虚空等の如く(喩)。これは清辨等を破し、かねて安慧をも破するのである。清辨等は勝義において諸法は空なり。唯、幻化等の如く虚偽のみあり。世俗において見も相も俱に有なり。外境は有なるが故に唯識ではなく、もし外境がなければ、識に何らの體も用も生じない。故に有境無心である。もし心には縁用あり。それ故に實の作用ありといへば、これは釋子にあらずと清辨が難するから、そこで唯識論においては、護法が右の如く難するのである。

そしてこの清辨等の批難は唯識疏に見られるものであるが、いま之を清辨の中觀心論(無と有との對論四四五頁)に求むるならば、第五十偈等がこれに當るであらう。因縁として顯現し見ゆるものから起れる色等の外境は、現に有なるものであるけれども、勝義としては空である。…それは幻の如く……。また第五二偈に云く、それら所

取能取の二取は、心々所の顯現であつて、外の色等の諸境と相屬關係にあると許されないものであるから、色等の外境を全く遮遣しても、所取能取の分別が起らないやうになると云ふことはあり得ない。これ等の文は唯識疏に相通ずるであらう。この清辨等の批難に對し護法は却つて反難し、能縁の行相ありとする。前には所縁の相貌ありとして正量部を破し、後には能縁の行相ありとして清辨等を破するのであるが、さらにこの前後の二文を合すれば、安慧の二分所執無の説を破するとも見られるのである(疏三本四三卷)。そして之は更に後の第八卷に、三性説がとかれる所に委しく明されるであらう。

次に三分の説を明すについて、もし自體分がなければ、心等は曾て經驗せざりし境を憶する能はざる如く、曾て經驗せざりし心々所等を憶することはできぬであらう。故に自體分、即ち第三分がなければならぬと論ずる。疏に量して云く、いま思念する所の、過去に曾て更ざりし心等をば、宿命と他心智等を除いて、餘の心は一切みな憶すること能はざるべし(宗)。曾て更ざりし故に(因)。曾て更ざりし色等の如く(喩)。そしてこの立論に對する批評が月稱の入中論の中、自證説の論難の下に見える(無と有との對論二八一頁)。但しこの唯識論の立論は唯識

疏によれば、佛地論卷三（大正二六、三〇三）にいふ如く陳那の集量論によるのである。

また唯識論には行相所縁について、

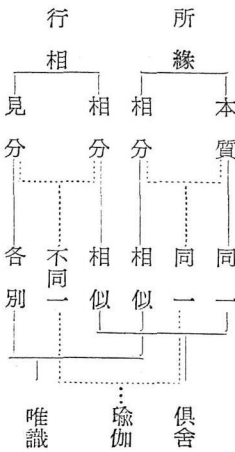
俱舍——同一所縁、相似行相

唯識——相似所縁、行相各別

とする。さらに瑜伽論卷一（大正三〇、二八〇）には、

瑜伽——同一所縁、不同一行相

といひ、これ等をいかに解釋するかに就て、唯識疏に二釋、樞要に四釋、瑜伽略纂に三釋、また西明に三釋あり、その釋が區々であるために、些か煩鎖となるのである。いま三論を綜合してその所縁行相の關係を記すならば



かくて行相所縁を釋するに就ても、俱舍より瑜伽、瑜伽より唯識と、境無識有の方向にむかつてゐることが知られる。なほ之について委しくは別に記したことがある。

次に四分を明すについて樞要（上末四七左）に量して云く、心々所は一刹那の中、定んでよく自顯すべし（宗）。

よく他を顯すが故に（因）。燈日等の如く（喩）。これは佛地論卷三に、諸の心々所には勝劣ありと雖も、みな能く外を縁じ、内に自體を證すべし（證自證分）。猶し光明の如く既に他を顯すをもつて、またよく自をも照すなりとあるによる。但し前の立場には法差別相違過がある。定んでよく自ら顯すべしといふ宗法には、緣慮自顯と非緣慮自顯と、二の自顯がある。立者の意許は緣慮自顯を立てようとするのであるが、しかし同喩の燈日等は非緣慮自顯の法であるから異喩となる。して見ると、よく他を顯すが故にの因は喩に轉じて、同無異有缺後二相となるのである。能達量に云く、心々所法は一刹那の中に非緣慮自顯なるべし。よく他を顯すが故に。燈日等の如く。然らばこの能達量は眞能破となるか、どうかといふに、眞能破とならない。何となれば心々所法に緣慮の用あることは立敵共許であるから、もしもこゝに非緣慮といふならば、敵者に違宗過を生ずるであらう（四分義私記、立分不同門）。

そしてこの立論は月稱の入中論にも見られる。例へば火の生じた時には、火の自體と瓶等とが二として生起す

るのではなく、そこに同時に二のものを照し顯すはたつきがある如く、識(心所なるべし)も亦それが生ずると云ふことは、二として生起するのではなく、識自體と境とを了知するはたつきが、はたらいてゐることである云々(無と有との對論二八四頁)。また寂天の入菩提行論にこれを明して……燈は瓶等を照しつゝまた同時に自らをも照すといひ(同上三二一頁)、これを破して、燈なるものは少くとも我々の知覺の對象であるから、さう云ふ燈なるものが假りに識論者の云ふ如く、他のものに相依ることなく、自ら照明するものであるにしても、さう云ふ燈相なるものを我々が燈なるものは自照するものであると覺慧を以て理解し、人に語り、そのことを知らしめ得るものである。我々の知覺の對象として有ると決定せられ得るものである。然るに覺は知ることであり、その覺が燈の如く照明するものであると言ふても、併し一體さう云ふことは、どう云ふ知によつて知られ語られるのであるか……(同三二六頁)と喩と法との不一致を難するのである。蓋しこれ等の文は前記の四分建立に關する一連の文と相通するであらう。

また此の四分説を明す一段の文について、唯識疏(三本五五左)には、この論文は護法菩薩が四の教と理とに依

て四の差別を説くなり。俱に依他性なり。安慧等の諸師の知見にあらずといふ。これによつて今の一段の文は護法獨自の釋文なることが知られる。安慧釋、轉識論などにかゝる釋文が見られないのも當然である。なほ四分について委細は私に別に記したものである。

次に外境の器界について、まづ護法の説を記せば、異熟識が共相(共中共)の種を成熟せる力の故に、變じて器世間の相に似る。即ち外の大種と及び所造の色とである。然らば誰の異熟識がこの相を變爲するかと云ふに、一切有情の異熟識がこの相を變易する。たとひ他方の自地に生ずるとも、かの識がこの土をも變爲する。それ故に器世間が壞するときに有情はなくとも現に世界は有るといふ。また有根身について、これは異熟識が不共相の力を成熟せる力の故に、變じて色根(不共中共)と根依處(不共中共)とに似る。即ち内の大種と及び所造色である。かくて第八識所變(所緣)の境は有漏種と十の有色處(五根五境)と法處所攝色(定果色)である。これは護法の釋である。

なほ有漏の識變を釋するに因緣變、分別變の二ありといふ。唯識疏にこれを釋して四釋を出す。いま之を表に示せば

疏 識 唯							
正護 法	勝難陀	法 護					
4	3	2	1				
因	因	因	因	王	心	第八	
分	因	分	分	所	心		
分	分	分	分	王	心	第七	
分	分	分	分	所	心		
因	因	分	分	緣同	心 王	第六	
因	因			中定			
分	分			散獨			
分	分	分	分	所	心	前五	
因	因	分	因	王	心		
因	因	分	因	所	心		
4	1	3	2				
要		樞					

因—因緣變、任運起、有實用、性境也。
分—分別變、強籌度、無實用、獨影、帶質。

なほ唯識論には外境、即ち器世間を明すについて、月藏の説をあげ、また有根身を明すについて安慧の説を出すのである。但し安慧釋を見ても、これは見えないやうである。かくて唯識論の行相所縁の別釋もまた護法獨自の釋と見て妨はない。